

## 南伊豆に今、何が起きているのか？（簡略版）

### ～ 渥美半島の風車被害から学ぶこと～

M・M & Y・C

◆ . . . . . 真実を知りたい . . . . . ◆

静岡県南伊豆町に巨大な風車 17 基を建てる計画がある。  
伊豆半島突端の小さな山々の尾根を削って風車が建ち並ぶ。

住民の安全は守られるのだろうか？

自然環境は大丈夫なのだろうか？

安心の確約は何ひとつなく、不安は大きくなるばかり。

「実際に風車と暮らす人々の話を聞きたい。」

我が町にやって来る予定の風車がどのようなものなのか体験したい。

私達は風車と共に暮らす町・渥美半島を目指して出発した。

## 4日間の行程

### ★ 1 日目（晴れ～夜/雨・風速 1～2 m）

A.M.10:00 . . . 南伊豆出発

P.M.4:00 . . . 豊橋市・細谷風力発電所（GE・1,500kw）

P.M.9:30 . . . 田原市・久美原風力発電所（GE・1,500kw）

### ★ 2 日目（曇り～夜/雨・風速 2～1.2m）

A.M.10:00 . . . 田原市・渥美風力発電所（ベスタス・2,000kw）

P.M.3:00 . . . 田原リサイクルセンター風力発電所（リパワー・1,980kw）

P.M.4:00 . . . 田原市・田原臨海風力発電所（ベスタス・2,000kw）

P.M.7:00 . . . 久美原風力発電所

### ★ 3 日目（晴れ・風速 8～16m）

A.M.7:00 . . . 田原市・久美原風力発電所（GE・1,500kw）

A.M.11:00 . . . 渥美風力発電所（ベスタス・2,000kw）

P.M.3:00～P.M.8:30 . . . 田原臨海風力発電所（ベスタス・2,000kw）

### ★ 4 日目（晴れ・風速 3.4～6 m）

A.M.10:00 . . . 田原臨海風力発電所並びに細谷風力発電所に於ての証言

P.M.2:00 . . . 帰路につく

※ \_\_\_\_\_線は南伊豆町に建設予定の機種ベスタス(デンマーク製)です。

※ 赤字で表記した発電所は、南伊豆町に建設予定の石廊崎・大瀬風力発電事業に関わる事業者が運営しています。

★ 一日目 2008. 11. 26 (水)・晴れ

AM.10:00

南伊豆町出発。

PM.4:00 (風速は 1~2m、南西の風)

《細谷風力発電所》到着。

キャベツ畑が広がりどこまでも平地が続く夕景の中に、突然風車が目に飛び込んで来た。

その風車から 1 キロ以上離れているにも関わらず、夜眠れないなどの症状を訴えている“M さん”にお会いして話を伺うことができた。ブレードは、今にも止まりそうな速度でゆっくり回っている。風車からの音はこの風況では聴こえない。

普段も耳で捉える音はほとんどないそうだ。では何故、音は小さいのにこんなに苦しんでいらっしゃるのか？

.....

### ① Mさんの話

**「音はしないのに、夜眠れない。眠りに就いても夜中 2 時か 3 時頃になると、毎晩妙な感じで目が覚めてしまう。音ではなく、頭の中、耳の奥で『グワー・グワー』と渦まきように聞こえてくる。それが気になり始めるとその時点からもう眠る事ができない。」**

風車稼働後、半年経ってから不眠症状が出始め、最初はなぜなのか分らなかったが、だんだんとその響きのリズムが風車の回転と一致している事に気がついたと言う。

**「頭の中で何か渦巻く感覚で眠る事ができない。今でも睡眠不足の状態がずっと続いている。」**結果、昼間の仕事に眠くなる。・・・ついに先日も、日中の仕事で運転中に睡魔に襲われ、車をぶつける、という事故を起こしてしまった。夫婦で老後をこの地で送ろうと楽しみにしていたのに、**「妻は“眠れない苦しさ”から避難する為、実家に帰ってしまい、この家に戻れずやむなく別居生活が続いている。」**

**「たった 1 基の風車が建ったおかげで被害は甚大、生活はめちゃくちゃだ。今でも月一で事業者と話が続いている。」**M さんは将来、この土地を切り売りしたいと思っていた。**「しかし、こんな状況の土地になってしまっただけでは欲しがらないだろう・・・」**と語ってくださった。

風車からの距離がある程度離れていても、聴こえない音(低周波音)に苦しめられている方が存在する事に驚いた。(低周波曝露による)“風車病”という病名はまだ確立されておらず、誰にも認めてもらえない。体調を崩した上、ご夫婦が一緒に暮らせない。“たった 1 基の風車”で未来設計を壊され、生活は一変した。風車が身近にやってくる現実を、いきなり初日から目の当たりにした。

PM.9:30 (風速 1~2 m)

田原市六連町に到着。日が落ちてから曇り、小雨がぱらつき始めた。

細谷風力発電所は『豊橋市』、久美原風力発電所は六連という所にあり、『田原市』となる。離れた場所だが、事業者は同じ“M 社”が建てたものだ。まずは、久美原風車の傍まで行き状況を確認した。ブレードはゆっくり回ったり、止まったりの繰り返し。・・・にもかかわらず、**タワーの中から『異音』**がする。ウ゛〜ン という低い機械音、それと同時に イ〜ン〜ン と頭の先を通過するような高音が、同時に体を突き抜けて行く。更に風切り音がジュワン・ジュワンと体を包み込む。



〇さん宅近くより久美原風力発電所を望む

そこを離れ、風車から 350m の所で被害を受けている〇さんのお宅に行き話を伺った。

## ② 〇さんの話

「風切り音が『シュー・シュー!』と聴こえ続け、機械から出る『ピー〜ン』という高い音や、『ウ〜ン』という低く唸るような音など数種が連続で襲う。そして、**家の壁や床が振動し続ける。**」

「**風車が建って以来、風車からの音で耳がずっと痛く、頭の後ろ・首の後ろあたりが、いつも重い。**」

「寝る為にかたを横たえると、からだ全体で音と振動を受けるので、とても眠れるものではない。**自宅は住める家ではなくなった。**」

「今は離れたところに**自費でアパートを借り、夜になると毎晩家族で避難している。**」と、稼働後からずっと続く様子を話してくださった。風車から近い事もあり、被害状況はかなりひどい。事業者は、そのような被害を近隣に与えた事に対し、きちんと“根本的な解決”に向けて対処したのか？業者の講じた策は次の話に含まれる。

## 〇さんの話（つづき）

「**風車が稼働してすぐに、（健康被害を含めた）この事態が発生した。この事態を何とかするよう、事業者に毎週2〜3回は電話をかけ続けた。**」対応は早く、測定をするという事で、ひと月の間に3回くらい業者が測定しに来て中間報告を出した。

- ・騒音＝問題なし（基準値を越えていない）
- ・低周波＝出ている（参照値を越えている）
- ・床面の振動あり

しかし、**報告は出すが詳細な測定データは全く出さない。**それでも最初のうちは避難場所として、事業者はホテルを提供した。その間に風車本体の防音工事と、本体が振動しないよう耐震用のパーを入れたという報告をもらった。

「処置をした」という事業者からの連絡でホテルから自宅へ戻ったが、自宅の被害状況は変わっていなかった。振動（低周波）も騒音も依然として何も変わっていない。防音工事に何の意味があったのか・・・。本当に工事を行ったのか？と思ったほどだ。

次の対策として、自宅に二重サッシを入れた。多少は音が小さくなったが、やはり効果はなく、気になる音は聞こえ続け、家の振動は現在も続く。

「**両親が住む部屋は二重サッシで多少は音の軽減ができたので、なんとか“我慢”をして住んでいるが、こちら側（〇さんが住む部屋）はその工事を施してもやはり住める家には戻らない。**」

生活を一変させ、苦痛を与えた上に我慢までさせる。そんな巨大な人工物を建てた事に対する事業者の処置は、その場しのぎであって“根本的な解決”にはほど遠いものだった。

「**事業者が測定をした後、詳細な測定データをどうしても出してくれないので、中部電力に測定を申し込んだ。中部電力も測定に来たが、やはり測定結果のデータは、公表してくれなかった。**」

0さんは最終的に、愛知県に測定を頼むことにした。「風のほとんどない日に数時間測りに来た。」(計2回)県の結果は、『騒音は、基準値以下』という事で処理されてしまった。

「これだけ訴え続けても何も改善されない。人として最低限の安全な生活に戻るには、この風車を止めてもらうか、撤去してもらわないかと思っている。」

.....

事業優先、事業ありきで進んでいく不条理な現実。健康を害し、苦痛を訴える人達の声は拡がらないように、やんわりと抑え込まれていく。一体何の為、誰の為の風車か？建ってしまったらもう遅く、事業者も行政も他人事。被害者の声はどこへも届かないのか。

小さな子供さんを持つ彼らが、これらの被害を我慢しなければならない理由は何もない。まったくもって理不尽な話だ。

## ★ 二日目 2008・11・27 (木)

A.M.10:00 (風速 2 m)

《渥美風力発電所》へ到着。(南伊豆町に建つ風車と同じ物)



厚美風力発電所

伊良湖手前で42号線を右折、丘の向こう側に風車が見え始める。『で、でかい！！』と仰天！今まで見たどの風車より遥かに大きい！数キロ離れていても目の前に建っているようだ。ブレードの直径は、天城ループ橋とちょうど同じ大きさ。あれが立ち上がった状態なのだ・・・と、その巨大さにたじろいだ。

「白い巨大な槍」が丘全体に突き刺さっているように感じられた。

風車の建つ山へ近づく。今日は風が弱く、風車は殆ど回っていない。明日は風が吹くという予報なので、本日のこの場所でのチェックはここまでに

して、田原臨海公園方面・田原埠頭(トヨタ自動車工場)に建つベスタスを見に向かった。

PM.3:00 (風速 1・2 m)

トヨタ自動車工場を中心に田原臨海エコ・パーク、田原市リサイクルセンターが並び、大規模なウィンド・ファームとなっている。見上げるとブレードはゆっくりだが回っている。このリサイクルセンターのリパワー1基は、かろうじて回っている状態でも、風車近くは、風切り音の「シュ！〜〜ワ〜ン♪、シュ！〜〜ワ〜ン♪、シュ！〜〜ワ〜ン♪」という大きな音が、上から落ちてくる。これだけ大きな風車なら、当然とも言えそうだが。数百メートル離れてみても、風切り音

は耳に入ってくる。“終わりのない音”がだんだんつらくなってきたので、リサイクルセンターから、エコ・パークの風車へ移動した。

PM.4:00 (風速1～2・4m)

《田原臨海風力発電所》へ到着。

南伊豆町に建つ予定の機種と同じ出力だが、タワーの高さが11m低い。11m違うと印象は随分違う。近くで見るとどちらも『異様にでかい人工物』だが、遠くで見ると“頭でっかちの巨大風車”が乱立している印象だ。臨海公園へ行く道路は中央分離帯が幅広くとられ、分離帯に植え込み



田原臨海エコパーク内の風車 ベスタス 2000kw

まで施されている広めの対面通行だ。

その道沿いに2基。それも道路脇ギリギリに建っている。

道路脇ギリギリに建てられているのは、「タワー部分」である。タワー部分が道路沿いなものだから、当然上を見上げればブレードが覆いかぶさる様に**道路の真上で風を切る事になる**。つまり、道路脇に建った風車のブレードは、殆どの確率で**道路の上に40m突き出して回る事になる**。

広い対面道路の両面をブレードが覆う為、逃げ場がない。ブレードがシュッシュと回るその下を通らなければ公園に着かないのだ。

通過しようとする真上で巨大な人工物がグルグル回る様はとても怖い。**セット・バックも何もあったものではない**。「我が社の風車は、こんなに近くでも安全、危険はありません。道路上にそびえる風車、美しいでしょう!？」・・・と言わんばかりの建て方である。

埠頭の突きあたり右手に2基。

以前、南伊豆の風車を計画した業者は「機械の音はない。風切り音だけ」と、私に説明したが、とんでもない!イゝ〜〜という低い唸り音にからだを取り囲まれる。飛行機が飛んでいるような音となって、ゴォ〜〜と降り注ぐ。“いつまでも通り過ぎていかない飛行機”が頭の上にいる。

暫くそこにいたが、だんだん頭の後ろから額の先に向かってぐらぐらしてきた。

おかしいな・・・と思っていたら、そのうち胸と背中を両面から押さえられるような**圧迫感**を感じた。ちょうど船酔いの時に経験する、吐く手前の感じ。「まずい・・・」と思い、そこを離れようと歩き始めると、なんだか地面から足の裏が浮き上がっているような感覚に襲われた。

以前、熱川天目で風車被害にあわれている方が「**真っ直ぐに歩けない・・・**」とおっしゃった事があった。その時にはどんな感覚なのか想像がつかなかった。今、この体験で初めて、ああ、これがひどくなったら確かに真っ直ぐ歩けないだろうな・・・と、とてもリアルに納得できた。

視線をブレードからそらしてもモノが大きいのと数が多いのとで、視野からはずしきれない。規則的な動きなので、無意

識に目の端のどこかで常に捉えてしまう。それがよけい吐きそうな気分には拍車をかける。「これ以上は無理だな・・・」と退散の準備。また明日来る事にした。

PM.7:00 (風速 6 m)

六連町に戻る。

風がだんだん強くなってきたので、再び久美原の風車を 300m～1 km の距離、東西南北、多方面から音の聴こえ方を確認してみた。風が強くなれば騒音も比例する。ブレードが回るスピードは早くなり、風切り音も大きくなる。逆に、風車からの距離が遠くなれば、勿論風切り音は小さくなる。が、それでもその残音は風に乗って夜の空をぐるぐるまわり、ウォ～ンという唸りで降りそそいでくる。機械音と思われる下から来る微妙な低音と、頭の上で聴こえる小さな高音は距離があっても知覚できる。

PM.9:00

細谷風力発電所の近隣にお住まいの N さんに、昨夜泊めて頂いた O さんのお宅で話を伺った。

.....

### ③ N さん (女性) の話

**「風車が回るようになってから、病院通い ばっかりになってしまった。」**

風車から 700m 前後の距離に住んでいるが、稼働し始めてから半年くらいで急に体調が悪くなり入院。検査の結果、心臓のまわりに水が溜っていた。二週間入院して抜いた水は 600cc。MRI やエコー、CT で検査しても原因がわからない。膠原病とも言われてあちこち回された。今でも二ヶ月に一回の病院通い。それが風車による影響なのかどうかは全く不明だが、今までとは違うリズムで体調が崩れたのは確かだという。

**「風車が回り始めてから すぐに頭と耳が痛くなり、それは今でも続いている。風車が少しでも回ると耳の奥が痛くなる。家と風車から遠く離れるとその症状は和らぎ、からだは楽になる。」**更に夜になると、「航空灯の光が反射して眠れない。」自宅の 2 階に入り込んだ光が壁に反射して眠りにつけず、現在 2 階には住めなくなった。

.....

完全な健康でない人にとって、風車からの音や低周波による影響は、通常よりも敏感に感じとり、数倍大きな苦痛となるのではないだろうか。また、以前までの病状が悪化する事も考えられるのではないのか？

N さんにいろいろなお話しをお聞きしながら 1 時間半くらい経った頃だろうか、急に N さんが、

**「あ、耳の奥がすごく痛くなってきた。さっきからキ～ンとするなと思っていただけで、ごめん、痛くてちょっと耐えられない。申し訳ないけど、ここ (O さん宅の低周波の状況) はきついで帰りますね。」**と、引き上げていかれた。二重サッシに厚手のカーテンをひいていたのだが、毎日悩まされ続けている彼女にとっては、殆ど役に立たないようだった。・・・にも関わらず耳が痛くなるのは、やはり可聴音だけではない成分(低周波音)があり、私のような一時的な体験と、低周波を浴び続けている方の体感とでは、また違いがあるのかもしれない。

## ★ 三日月 2008・11・28 (金)

AM.7:00～AM.9:00 (風速 8 m)

久美原風車を再び体感。

この風速下での風車の騒音は相当うるさい。しかし、これが風車としては一番安定している状態だという。先に表現した『上空をいつまでたっても去っていかない飛行機』は、『低空で飛び続けるセスナ機』となっている。

風のある時と無い時を比べて気がついた事は、からだに受けるなんとも言えない圧迫感は、風が強くて風車がガンガン回っている時よりも、ゆ〜っくり回っている時の方がきついという事だ。

AM.11:00 (風速 9 m)

昨日も訪れた《渥美風力発電所》(南伊豆町に建つ風車と同じ)へ到着。

頂上近くの風車まで行って息をのんだ！**風車が落とすその『影』の大きさに。**

巨大な風車は影も巨大だ。その巨大な影が、丘いっばいにグルン・グルンと回る異様な景色。光が降り注ぐ草原地で、常に規則的に目線のどこかを横切っていく“黒い影”。岩や立木など、少しでも**凹凸があるとそこを斬りつけるように影が走り、**つい目を奪われてしまう。**起伏のある地面では、ブレードの影はぐんにやり曲がって回る。**きっと**月夜の晩にも、このような事が起きるのだろう。**からだが昨日のように辛くなってきたので、丘を下る事にした。

PM.3:00

259号線をトヨタ自動車工場に向かって進む。

海岸線沿い、宇津江付近だろうか。海を見ようと道路をはずれて海岸に出た。

左は半島突端、最西の渥美風車群、右は田原市最東にある臨海公園の田原臨海風車群、その地点からそれぞれ15kmは離れているのに、風車群を一望できる。

のどかだったであろう美しい畑の続く風景は、景観も考えずにぼこぼこ建てられた送電塔と、あちこちに張られた送電線であやとりのようにになっている。



R259 から田原臨海風力発電所を望む

静岡県は、『**風車半島・伊豆半島**』と目標を

**立てているらしいが、伊豆半島の人々は本当にそうなる事を望んでいるのだろうか？**

PM.5:30 (風速 16 m)

《田原臨海風力発電所》到着。

この風力発電所から見て、道路の向こう側の分譲住宅地は近いところでも風車から1kmは離れている。

この状況ならば、以前 事業者が私に言ったように、「問題や苦痛を感じている方はいない」かもしれないと思っていたのだが、地元の店や地元の方々の話を伺って驚いた。

#### ④ 田原臨海風力発電所近隣の方々の話

.....

**「この地域で風車による被害が全くないとは、とんでもない！ただ、言えないだけだ。」**

おおよけに口を開く事ができなければ問題を抱えている人がいても、“問題なし”と事業者や自治体に片付けられてしまうという事だ。 しかし、問題はあった。

「この町は『T社に 食わせてもらっている』という意識がある。」

「喉まで出かかっているが、言えない。」

個人宅では毎年、盆・正月に頂きものをする。しかし受けとれば、T社に 関する事には口をつぐむしかないし、地区でみんなに配られるものを受け取らない訳にはいかない。「問題があっても、それを言えるような状況下に置かれていない。

我慢をするしかない。」

「この距離でも風車からの騒音・低周波で眠れない・耳が痛い・・・など、いろいろな症状が出ている人がいる。地元住民で耐えられなくなった人達は、家を出て遠くへ移動してしまった。」

転勤族もいる。「そういう家族は数年で引っ越すので、敢えて口を開くことはしない。」

「社員の中にも持ち家の人がいるが、住めなくて家を捨てて移動した人もいる。」

被害に遭われている人々が移動して、そこに人がいなくなれば「被害はない(事業者の発言)」という事なのだろう。

.....

PM. 7:00 (風速 16 m)

《田原臨海風力発電所》

《田原風力発電所》

風速計は 14.5m～16m の間をいったりきたりしている (瞬間的に 18m)。車から降りると、台風のように吹きつける風に身体ごと飛ばされそうだった。

夜見る風車は更に大きく感じられ、驚異的な圧迫感がある。工業地帯の中にあつてさえ、強烈なインパクトを与えるこの巨大な物体が、静かな夜の山々と星空だけを仰ぐ南伊豆の民家の間近に 17 基も建ったら・・・と想像してしまっただけ、一体、どれだけの苦痛を強いられるのか恐怖である。

風車の下で一晩 車中泊をして低周波の実情を体験するつもりで来ていたのだが、この騒音にはすっかり気がめいってしまった。夜 8:00 頃、お話を聞かせてくださるという“S さん”という方から携帯電話に連絡があり、やっとその場から逃げ出す決心がついた。

PM. 9:00

S さんのお宅は、風車からかなり離れたところに在る。平成 16 年には S さん宅の近隣も、風力発電所の候補地にあがっていた。そして“M社”が事前説明をしに自治会、並びに土地改良区とそれぞれにやって来た。その時に土地改良区で行われた説明会の内容を話して下さった。

.....

## ⑤ S さんの話

「その頃、私は土地改良区の役員だったので、事前説明で立ち合う事になった。風車そのものについては、平成 16 年のその時点ではよくわからなかった。」しかし、事業者の説明する内容がおかしい事に気付いた。

“M社”は、風力発電事業を説明する話の中に、この町が困っている“産廃不法投棄問題”をあげ、「風車が建てば不法投棄は止まる。」と言ってきた。どこに根拠があるのか S さんが聞くと、「千葉県のある地域で、風力発電所ができてから不法投棄が止まった。」と事業者は言った。



・それはおかしいとSさんは思ったそうだ。

「私は産廃問題にずっと関わってきたので知っているのだが、あれは産廃Gメンの働きや、知事が変わったりした等、他の要因で止まったのであって、風力発電事業によって止まったのではない。千葉県の風車建設前に、産廃の不法投棄は既に止まっていた。風力発電所ができたのは、それから随分後の事。他にも『風車が建てば観光地になる』とか、地元が欲しがりそうな話を、さも簡単に手に入るかのように言った」

「次に、環境影響調査をやるにあたって、この辺は渡り鳥が多いし、バードストライクの心配もあるので、こちらから、この辺りの野鳥について詳しい“O先生”を推薦した。すると事業者は、『その人は、色がついているからダメだ。我々の方できちんとやる。』と言い出した。」

しかし、この地域で野鳥のアセスといったら彼以外に適任者はいない。現地の人達は皆、そういう見解を持っている。なのに、それが駄目だというのはおかしい話ではないか。

更に、自治会に年間・1基 40万円 × 基数分の協力金を毎年出すという。「金を渡すという事は、何かの我慢料ではないのか？」金をもらってしまったら、建設後に何か問題が起こったとしても、もう文句は言えないという事ではないのか？

「その時は、“風車はよいもの”と思っていたので、風車自体がおかしいとは思わなかった。勿論、自治会役員の中には事業者の説明について、疑問を持たなかった者もいる。」

**「しかし私は、事業の説明内容や進め方、やり方がすごくおかしいと感じた。そして事業者と何度かやり合っているうちに、そこに風車を建設する話はなくなった。」**

.....

地域の代表となる人間は、人々を守る義務があるはずだ。

Sさんが行動したように、地域の代表は影に隠れている嘘に気づき、目の前の欲や巧みな言葉に騙されず、きちんとその後を深く考え、事業者と対峙しなければ、事業者のやりたいように進められてしまう。事業者の説明を鵜呑みにせず、その先に起こりうるリスクを考えなければいけない。行政や地区の代表が迂闊であれば、あとは住民達が勇氣と意志を強く持つしかない。“建ってしまったら、もう遅い”のだ。

## ★ 四日目 (最終日) 2008・11・29 (土) 晴れ

AM. 10:00

“M社”が建てた細谷風力発電所付近では、まだまだたくさんの被害者の方々がいらっしゃるようだ。その方々のお話を伺うことができた。

.....

### ⑥ Mさん (女性) の話 (風車から約700mの場所に住んでいる。)

**「なんと表現したらいいでしょうか。胸を前後からグーッと圧迫されている感覚で、常に苦しいんです。」**

「医者に行っても異常がなく、更年期障害ではないかと言われてしまう。風車が稼働してからその症状は始まり、良く

なる事はなく常に身体が重い。しかし、**風車から遠く離れた地に出かけると、その間だけは胸の圧迫感が弱まり、苦しい感覚から解放される。誰にも理解してもらえず、誰にも低周波による被害とも認めてもらえない。**

.....

⑦ Aさんの話（風車から600mの位置に居住）

「とにかく、夜寝ても夜中の2時～3時頃になると毎晩、起きてしまう。寝た気がせず、常に睡眠不足。寝覚めが悪く、**頭が重い。**」

.....

更に驚いた事に、風車から自宅まで3kmも離れているにも関わらず、低周波被害を訴える方がいた。

.....

⑧ Oさんの話 住まいは風車から3km離れている。（前出のO氏とは別の方）

「**3kmも離れているから、大丈夫だと思っていた。・・・まさか自分が・・・と思ったよ。**風車からの騒音は聴こえるが、夜中かすかに聴こえる程度なので、最初は何故起こされるのかわからなかった。低周波の被害は2km位までと聞いていたのだが・・・。しかし、**現に私は3km離れていても苦しんでいる。今でも眠れない日々は続いている。**」

「**風車稼働後すぐに症状が出た。今までとは違う体の感覚で、夜眠れなくなった。寝ついても、夜中2時～3時頃起こされてしまう。そのような時間に起こされるものだから、毎日寝覚めが非常に悪い。**」

.....

このような辛い生活を強いられている方々が、実はたくさんいらっしゃったのだ。また、田原臨海風力発電所の周囲でこのような事も起こったという。

.....

⑧ Oさんの話

「13基の風車が建っているT社工場周辺から、海上沖2kmに『**姫島**』という無人島がある。そこへ友人達と船で遊びに行った。島に渡ってしばらく遊び、浜に寝転がっていた。**暫くして、さて起き上がろうとすると、身体が全く言う事をきかない。自分の意志では起き上がれない状態になっており、友人が手を引っ張って助け起こしてくれた。**」

「**起き上がった時には、頭の後ろが殴られた様にずっしりと重かった。圧迫感やら気持ちが悪いやらで、その島にいる事はもうできなかった。友人は身体を横たえていなかったせいか、私のようなひどい症状に陥る事はなかった。**」

「あの付近の魚が、いなくなるわけだよ・・・」Oさんはポツリとそう言われた。

.....

PM.2:00

お世話になった方々に挨拶を済ませ、いよいよ帰路についた。被害を受けている方々にお話を伺って、「今更反対しても、もう遅い」とあきらめてしまったら南伊豆の町は壊れていくのだ、と痛感した。事業者は地域住民に「“被害”が起きたら保証します」と、簡単に約束する。しかし 実際に被害が起こっても、どこの場

所のどの業者も、その住民の“被害”をなかなか認めようとしなない。

事業者達が言う「保証する」とは、運転を止めずに事業を続行する為の一時的な策でしかなく、何か問題が起こったとしても、応急処置をその都度行なうだけなのだ。

**“風車の被害”が公害として認められるまでには何年もかかるだろう。**

事業者達は「他社の風車に比べ、当社の機種は静かです。」と 南伊豆だけでなく、どの計画地でも同じ事を言っていた。今回話を聞かせていただいた皆さんも、

**「うち等の所に建てる時も『ウチの会社の風車は静かだ』と言われた。ところがどうだ、蓋を開けてみりゃ、騒音や低周波で悩まされ続けている！」**と、声を揃えておっしゃっていた。

事業者は風車と住民の共存を考えているわけではない。利益が優先なのだ。風車が建ってしまえば、何か問題が起こっても騒がれないギリギリの処置しか行わず、根本的な解決には向かわない。

しかし風車が建つ前ならば、建設途中であろうと、住民の安全が確保できない限り、住民の不安の声を無視して工事を押し進める事はできないはずだ。風車が建ってしまって、大勢の被害者が出る前に何かできる手だてはないものか。

様々な思いで いっぱいになりながら、PM.9:00 頃、南伊豆町に帰りついた。

## 付 記

今回の旅で“風車”とはどのようなものかを、あらゆる天候・風況体験した。そして風車が人にどんな悪影響を与えるかを、苦しみを抱えた大勢の方々とお会いして、この目と耳で確かめる事もできた。

大きな金が動く風力発電施設建設は、事業進行も強引になりがちだ。

「風車は未来のため、世界のため」と事業者は大義名分を振りかざす。地域住民を無視した 一方的で性急な風車建設が、多くの人々を苦しめている。風車建設の為にはあらゆる手を使って、住民の“不安の声”を抑え込み、いい加減なアセスメントを行い、建設を押し進める。その結果が、日本各地で健康被害を多発させ、環境破壊に輪をかけているのだ。

では何故、『環境に良いもの』であるはずの風車が『脅威的な危険物』と化してしまうだろう？

それは、未だ規制する法が無い“自然エネルギー導入”という国策に、事業者が便乗し傍若無人に建設を行うからだ。健康被害を出すような事業を行っても、風車を規制する法律がない為に、罰せられる心配がないからである。

以前、南伊豆町に説明に来た事業者達に、他県で風車被害に遭われ苦しんでいる方々の報道や記事について質問したことがある。ある事業者は、

**「一部の住民にスポットを当てた映像が、大事のように流れてしまっただけ（M社）」**と答えた。

“一部”とは何事だろうか。仮に少人数だとしても、風車の被害者が実際におり、悩み苦しんでいる事

が最も重要な問題ではないか。また、ある事業者は

**「わが社では、被害や問題を一切出していない。(J社)」**と答えた。

被害の声をあげられない人々がいるのを知っていても、公にならなければ「被害は出ていない」と胸を張る。

問題を正面から解決せずに、何度も同じ過ちを繰り返す事業姿勢。取り締まる法が無い事を盾に、「法は侵していない」と公言し、彼らは今もなお日本各地で風車建設を強引に進めている。

行政の責任も然りだ。どの町も、風力発電事業の計画内容を大々的に、きちんと住民に伝えることをしない。住民に騒がれないよう小さな知らせのみに留め、既成事実を作っていく。そんな小細工をしていくうちに、町行政はいつの間にか事業者の手先のように、住民の声を抑え込む側となる。もはや彼らは自分達を守る事で精一杯となり、住民は町にさえ守ってもらえなくなる・・・。

保身にまわる町、さらには県・国行政の対応が被害を拡大させている。

風力発電事業は私達の税金で成り立っている。しかし、そんな態度で対応する町や県や国に、私達は税金を払わなければならないのか。私達は自分自身を苦しめる為に、お金を払うようなものではないか。

苦しめられるのは、もちろん大人だけではない。これから育っていく地域の子供達にも危険は及ぶ。「もう建つのだ、反対してももう遅い」と、私たちがあきらめることは事業者の思うツボだ。目に見えない圧力や策略に屈したら、大事な子供達の健康さえ守ることはできない。

私達が今回の旅で、この目で確かめた事や知りえた事実は、建設を押し進めたい事業者や、受け入れを許可してしまった町行政からすれば、知られたくない事実ばかりだろう。もしかしたら、この記録はそんな彼らに「一部の出来事に焦点を当てた偏見報告」、「反対したいが為の大袈裟な表現」あるいは、「小さな事を大事のように吹聴するホラ吹き」と片付けられてしまうかもしれない。

しかし、私はこう思うのだ。“風力発電事業”に対して 大きな疑問を持ったならば、「危惧が払拭できない」、「事業に納得できない」、「身の安全が確実でない」と、いろいろな観点から事業者や町、そして県や国行政に質問・意見を投げかけていくことが大事だと。

もし建ってしまったら、様々な被害が起こる可能性は大きく、そして被害が起こったその時から、住民と風車の長い闘いが待っている。

大人しく我慢して、つけいられた町には、いずれまた“新しい何か”がやって来るかもしれない。ただやみくもに「自然エネルギーだ」「未来エコだ」と流行りのような吹聴に、私たちは踊らされるのではなく、一人一人のしっかりした意識で、正しいエコロジーの姿に変えていくべきではないだろうか。